

特集にあたって

考古学は、石器の機能と使用について長い間強い関心を抱いてきた。セミョーノフの記念碑的著作「先史時代の技術」(Semenov 1957, 1964)の刊行によって、使用痕分析がその問題の解決に力強い手段となることが示されてから、使用痕研究の歴史は、半世紀になろうとしている。その後、若干の停滞期を経験し、70年代半ばに多数の使用実験に基礎をおく実験使用痕研究の登場(Tringham et al. 1974, Keeley 1980)によって、再度研究の展望が開かれることになった。キーリーが開発した使用痕分析法(高倍率法)の有効性は多くの研究者の認めるところとなり、世界中で取り組まれ、大いに発展した。一方で、80年代後半になって、高倍率法の有効性に関して激しい論争も行われた(Newcomer et al. 1986)。80年代の使用痕研究は、考古学においてももっとも集中的に研究された分野の一つであったと言ってもよいだろう。90年代以降、とくに西欧では、使用痕分析は、タイポロジー、テクノロジーと並んで、石器研究の一分野を形成している。

我が国においても、70年代末に本格的な実験使用痕研究が開始され、80年代になって、その成果が発表されるようになった(阿子島1981、梶原・阿子島1981、芹沢ほか1981、御堂島1982・1986、山田1986)。これは世界的な研究動向に連動したものである。80年代には、まだ使用痕分析者が限定されていたが、90年代になると次第に関心をもつ研究者が増え、報告書などにも分析結果が掲載されるようになる(御堂島1993、石器使用痕研究会2001)。とくに弥生時代の取巻具とみられる石器を対象とする研究が多く発表されるようになった。それは、旧石器時代の石器などに比べて経年変化の影響が少なく、実験石器と同様な使用痕を検出できること、同定が比較的容易な使用痕光沢面(A、Bタイプ)が対象になったことなどによるものと考えられる。そのような中で、95年には石器使用痕研究会が結成され、2002年には初の使用痕分析に関するシンポジウム「弥生文化と石器使用痕研究」(石器使用痕研究会・大阪府立弥生文化博物館 2002)、翌2003年には「旧石器文化と石器使用痕研究」と題するシンポジウム(石器使用痕研究会 2003)が開催されている。

このように一見順調に発展してきたようにみえる使用痕研究であるが、いくつかの前提的、技術的課題や問題点もある。また、使用に関する単なる推定を越えた研究も現れているが、方法的な検討がさらに必要と思われる。

本特集は、このような状況の中で、石器の使用痕研究について現在までの到達点と課題を整理し、その問題点や限界を踏まえた上で、今後一層の考古学研究への貢献の道筋を探ることをテーマとして企画したものである。具体的には、①理論・方法的な研究と②実践的研究について各氏が執筆していただいた。

理論・方法的な研究としては、五十嵐彰氏が痕跡を通してみた使用と製作の連鎖構造について、御堂島が使用痕光沢面に関する論争とその展望について、澤田敦氏が石器のライフ・ヒストリーと使用痕分析について、山田しょう氏は石器の機能を社会関係の指標として捉えるという方

法論的枠組みについて論じている。

また、実践的研究としては、旧石器時代のナイフ形石器の機能について伊藤典子氏、縄文時代の磨石類について池谷勝典氏、弥生時代の取穂具研究に関する現状と展望について原田幹氏、弥生時代の片刃磨製石斧の機能と着柄について平塚幸人・斎野裕彦氏、古墳時代の岩手県出土石器について高瀬克範・丸山浩治氏がそれぞれの問題意識に基づいた研究成果を提示したものである。

いずれも意欲的な力作であり、テーマに相応しい論考をいただいた。

石器表面に残された様々な痕跡は、私たちに多様な情報を与えてくれるものである。使用痕研究は、使用に関する情報を読み解くためのもっとも有効な方法といえる。今後、この特集を基礎として、単なる使用痕分析を超えてさらに考古学研究の中に有効に位置づけられることを望むものである。

(本号編集担当：御堂島 正)

文献

- 阿子島香 1981 マイクロフレイキングの実験的研究。考古学雑誌66(4):1-27。
梶原 洋・阿子島香 1981 頁岩製石器の実験使用痕研究—ポリッシュを中心とした機能推定の試み—。考古学雑誌67(1):136。
石器使用痕研究会 2001 使用痕研究文献集成。石器使用痕研究会会報1:6-8。
石器使用痕研究会 2002 石器使用痕文献集成。石器使用痕研究会会報2:9-16。
石器使用痕研究会 2003 『第8回石器使用痕研究会 旧石器文化と石器使用痕研究—方法論的課題と展望—発表要旨集』。
石器使用痕研究会・大阪府立弥生文化博物館 2002 『第7回石器使用痕研究会 弥生文化と石器使用痕研究—農耕に関わる石器の使用痕—発表要旨集』。
芹沢長介・梶原 洋・阿子島香 1981 実験使用痕研究とその可能性(東北大学使用痕研究チームによる研究報告その4)。考古学と自然科学14:67-87。
御堂島正 1986 黒曜石製石器の使用痕—ポリッシュに関する実験的研究—。神奈川考古22:51-77。
御堂島正 1988 使用痕と石材—チャート、サヌカイト、凝灰岩に形成されるポリッシュ—。考古学雑誌74(2):1-28。
御堂島正 1993 日本における使用痕研究の展開。かながわの考古学3:28-37。
山田しょう 1986 使用痕光沢の形成過程。考古学と自然科学19:101-123。
Keeley, L. H. 1980 *Experimental Determination of Stone Tool Uses: A Micro Wear Analysis*. University of Chicago Press.
Newcomer, M., R. Grace and R. Unger-Hamilton 1986 Investigating microwear polishes with blind tests. *Journal of Archaeological Science* 13: 203-217.
Semenov, S. A. 1957 *Percubymaya Tekhnika*.
Semenov, S. A. 1961 *Prehistoric Technology*. (translated by M. W. Thompson) Cory, Adams and Mackay.
Tringham, R., G. Cooper, G. H. Odell, B. Voytek and A. Whitman 1974 Experimentation in the formation of edge damage: A new approach to lithic analysis. *Journal of Field Archaeology* 1: 171-196.